



第136号(2007)

〒733-0032 広島市西区東観音 8-10

ワールド・フレンドシップ・センター

理事長：森下弘 館長：ケント&サラ・スワイツアー

TEL (082) 503-3191

FAX (082) 503-3179

E-Mail wfchiroshima@nifty.com

URL: <http://www.wfchiroshima.net/>

アメリカPAXチームの簡単なプロフィール

マギー・ギルマン

email: maggieng@goshen.edu

ゴーシェンカレッジで「平和、正義、紛争学」を主専攻、「女性学」を副専攻で学んでいる。Goshen Student Women's Association 実行委員会をはじめとする多くの組織や活動に参加し、「Take Back the Night」活動などの企画をヘルプ。去年のサマーボランティア活動ではメノナイト災害援助によるハリケーンカトリーナの被災者の家の復旧作業に参加。自らの生活や学習を通して人々の生活がより平和になるような活動をしている。そして卒業後平和と正義のために働くつもりである。

ローランド・ソーサ

email: rasgranados@schwarz.ams.edu

ゴーシェンカレッジで神学と社会学の学位を取得し2003年に卒業。現在は、Associated Mennonite Biblical Seminary and Andrews University で神学と社会学の修

士号を取得中の大学生。ローランドは中央アメリカのエルサルバドルに生まれ、21歳のとき戦争難民となってカナダに移住した。教師、家庭教師、翻訳家、そして地域のピースメーカーとして活動してきた。例えば、Elkhart 地区のギャング団の抗争では著しい成果を上げた。ローランドは今後とも平和のために、そしてより良い社会をつくるための働きを続けるつもりだ。

エミ・キャサリン・オダ

email: emi.oda@emu.edu

エミは札幌でアメリカ人の母と日本人の父のもとで育ち、東西両文化のブレンドの中で幸せを感じる一方、「他と違う」というアイデンティティーの問題に早くから気がついてきた。現在、バージニア州、イースタンメノナイト大学で「平和、正義、紛争学」を専攻している。この度のPAX2007で行った広島、長崎、京都の他、これまで中東、トルコ、ギリシャ、イタリアも訪れている。彼女は、通訳や障害者のための行事、そしてフィリピンでは Habitat for Humanity のプロジェクトで家を建てるなどのボランティア活動も行っている。

メアリー・コックス

email : MECox@manchester.edu

メアリーは個人間及びグループ間の争いの解決を主体とした「平和学」を専攻し、将来看護師になろうと考えている。彼女は平和を支持するブレザレン教会の影響を受けて育ち、地域的及び世界的プロジェクトや、広範囲に及ぶ平和活動に参加してきた。春休み中、世界の様々な地域からの難民をアメリカで短期間収容するジョージア州にある Jubilee Partners 活動を支援し、そこで、リベリア、ブルンジ、スーダンから来た家族に出会った。この度の PAX2007 プログラムで訪れた広島、長崎、京都のほかに、ニュージーランドにも行っている。そして、医療実習のため中央アメリカのニカラグアに2週間行く予定である。

PAX メンバーからの便り

小田 エミ

苦心してこの文章を書きながら、私は信じられないような経験をしたのだ、という事に改めて気がつきます。私の話を待ち受けている人達に、どのように私の経験を伝えたらいいか、と考えながら、私は、先週の記憶を呼び覚まします。話すことは、沢山あります。もし、あなたが、まだ、ヒロシマや、ナガサキに行ったことが無ければ、出来るだけ早く、両地への旅行を計画してください。世界は、原爆生存者がまだ生きているうちに、証言を聞くべきです。

ヒバクシャたちは、話してくれます。彼らの話を聞けば、あなたは当惑するでしょう。「私は知らなかった。」と繰り返し思うでしょうし、それは事実でしょう。あなたは、打ちのめされ、

気がとがめ、恥ずかしく、また困惑するでしょう。そして、あなたが耳を傾けているヒバクシャが、大切にしまっている宝物のような思い出を持っていることに気づくでしょう。確かに、ヒバクシャたちは、耳や、数本の指が無かったり、全身にケロイドがあったり、目も当てられない程、変形してしまったりしておられるでしょう。又は、外見は全く無傷でも、内面は、何十年も前から逃れることのできない悪夢や、罪の意識や、恐ろしい場面などに悩んだり、放射線に起因する、体内を蝕むガンに苦しんだりしておられるかも知れません。それらすべてにもかかわらず、私は、1つの事を保証します。それは、ヒバクシャたちは、これまであなたが会った中で、最も美しく、勇気のある人達に違いない、ということです。あなたは、彼らの話を心の中に大事に留め、それを伝えることに、力を与えられたように感じるでしょう。そうすることで、あなたは永久に生まれ変わるでしょう。少なくとも、これが、私に起こったことです。私は、以前のままの私ではありません。

驚くような二週間の行程の間に、ひとつの場所から次の場所へと移動しながら、私は、人生を平和のために打ち込んでいる人々と友達になり、私の日本への愛は、再びかきたてられました。私は、これまで日本を知ろうとしていなかったことに気が付きました。日本は、宝石です。二つの平和公園で沢山の色鮮やかな平和の折鶴を見たことは、忘れることの出来ない光景ですし、世界中の平和のメッセージの書かれた何千もの灯籠が、広島平和公園の中を流れるおだやかな川の流れの上に浮かんでいる、これまで見たうちで最も美しい情景から去りがたく思った時の心の痛みも、決して忘れません。日本の、世界平和への願

いは、そして、憲法に書かれた戦争の否定は、私の心に焼き付いた、二つの貴重なメッセージです。私はそれをすすんで聞こうとする誰にでも、誇りを持ってその話をし、その気持ちを共有したいと思います。

私がしてきた旅は、私の人生の中での、なにか、大きなことの始まりでした。私の出会いは、私がより完全に日本人としての私自身を見つけ、世界の市民としての責任を自覚する助けになりました。私はまた一層、平和の代表者としての自信ができました。広島と長崎の人々は、生きているという、高められた感覚を持っておられるようでした。それが、私にも伝わったように思います。なぜなら、ヒロシマも、ナガサキも、共に「死」の物語なので、「復活」と「命」の物語を共有しようという市民たちの意思が、おそらく、日本中で一番力強いからでしょう。私は、いつでも、兄弟や、姉妹、おばや、おじ達、父母らに会いに広島と長崎に帰ってくるでしょう。彼らの家は、私の家で、私の家は、彼らの家です。私の心は、その人達で一杯です。

私には、地獄を経験した人々が、なぜ、声をたてて笑ったり、にっこりしたりできるようになったのか、親切で、寛容で、謙虚で、私の生活や、小さい範囲の経験に興味を持ったり、私を自分たちの娘みたいに可愛がってくれて、一杯の祝福で私を見送ってくださったのか、がわかりませんでした。私は、多くの男女の目の中に、神様が宿っているのを見ました。私は、この旅行以前にも、人間を好きだと思っていましたが、日本や、世界中の兄弟姉妹に、より深い愛情を持つようになりました。私の人生で始めて、私はこの目で本当の平和の仕事の美し

さを見ましたので、それを私の一生の仕事の一部にしたいと、心から願います。

メアリー・コックス

- ・ 8歳と幼かったため、それが死にいたることになるとは知らないで人々に水をあげたことを今でも悔やんでいるという話
- ・ 小さかったときの恐ろしい記憶が、今でも頭から離れないという話
- ・ 広島・長崎の被爆者が描いた1945年8月6日、9日の地獄絵
- ・ 広島と長崎の今の子どもたちが、戦争や核兵器に反対している姿
- ・ 被爆者の強さと自らの体験を語り継ごうとする強い意志
- ・ 原爆が現実の人々に起こり、病気、悪夢、恐怖というかたちで今でも続いていることへのより深い理解
- ・ ある意味で、私たちはみな被爆者だという実感

これ(いえ、もっと多くのもの)が、私が日本で体験したことです。

日本での体験が、すべて原爆とその影響に関するものというわけではありませんでしたが、それが私の滞在の主な目的でした。そしてこのことを私は人々に話すつもりです。私が見た痛みや勇気を共有し、原爆が二度と使用されてはならないというメッセージを伝え、そして、日本で受けた多くの親切について話したいと思います。たとえば、広島へ着いたとき、もうすこしで汽車に財布を忘れるところでした。降りようとしたとき、一人の女性が私を呼び止めて財布を渡してくれました。行く先々で、本当にたくさんの贈り物をもらいました。そして、ホ

ームステイ先で家族同様に迎えられました。日本を訪れ、このように個人的に平和を学ぶ機会を持つことができうれしく思っています。次のPAXチームも、私と同様のすばらしい体験が持てることを心から願っています。

日出ずる国への旅の回想

ローランド・ソーサ

この度の「日出ずる国(the Land of the Rising Sun)」日本への旅を回想しますと、様々な心躍るテーマが心に浮かび、どれを取り上げて焦点を当てるかが難しいくらいです。例をあげますと、列車は芸術的とも言える技術が駆使され、正確に決められた時刻に出発するという日本の驚異的な交通システムを思い出します。又、次に述べるようなあの国の美しさを思い出すのです。宮島では鹿や動物達が更なる原爆の恐ろしさなどは微塵も感じることなく、思いのままに動きまわっていました。長崎や京都の素晴らしい美しさとその継承された歴史を思い出します。それと同時に日本の政治あるいは政府が平和を希求した憲法九条を改憲したいと願っていることさえも思い出してしまうのですが。しかしながら私は日本人の美しさと回復力について述べようと決めました。日本人の回復力は国の物質的な繁栄で発揮されたのみでなく、原爆で被爆された「被爆者」として知られている方々が示してくださいました。

「被爆者」は、他の人類を脅迫し支配する野心を持って人間が開発した大量破壊の邪悪な爆弾である核兵器をなくするために、平和と和解のメッセージを携えて、世界中の政

府に呼びかけている人々のことです。

被爆者の方々の証言は心を揺り動かされ、深い感動を覚えるものです。空フミコさん(空先生)や松原美代子さんは2007年8月6日の祈念式でその経験を証言して下さいました。フミコさん(空先生)は証言で私たちに考えてほしい3つの重要な質問をされました。

1. 戦争とは何ですか？
2. 戦争を引き起こすものは何ですか？
3. 平和を維持するためにはどんな力が必要ですか？

美代子さんは聴衆に、平和記念公園の碑文である「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」の言葉を思い起こしてくださいと呼びかけました。それから彼女は聞き手である私たちに、自分たちの住んでいる所の人々にこの広島を伝えてくださいと述べました。声はかすれ目に涙を浮かべながら彼女は叫びました。

「国へ帰られたら、どうかあなたの家族や友人親戚の人々に原爆の恐ろしさと、広島の人々が核兵器の廃絶を心より願っていることをお伝え下さい。」

被爆者は原爆の悲惨な直接的犠牲者であり、核兵器の増加に反対して自ら声を上げる方々です。しかしこの美しく驚嘆すべき人々も高齢になり、私はこの人たちと一緒に核兵器反対の声を上げることができなくなりはないかと恐れています。それゆえ松原美代子さんは、やがて消えて行く被爆者の代わりに務めてくれるピースメーカーとしての役割を、最後に私たちに求めたのです。

「私たちはあなた方に、世界中の核兵器廃絶のための私たちの戦いを続けてくださることを託します。このあやまちが繰り返されぬようにする努力をあなた方に託します。平和な世界を創るために働きかけてくださることを託します。言い換えれば私たち被爆者は、希望と平和のたいまつをあなた方に託したいのです。たいまつを灯し続けてください。・・・永遠に」

最後に私は日本でお世話になった方々の美しいお気持ちを是非述べたいと思います。広島でも長崎でも、私達のホストの方々は私たちをくつろがせるために心を尽くしてくださいました。外国人としての我々に示してくださいましたホストの方々の深い敬愛や挨拶に、私は戸惑ったりもしましたが、我々西洋人も学ぶべきものでした。とりわけそのようなことを学べば私たちは自国の人々に対してさえもより深い心遣い出来るでしょう。

私たちのホームステイの体験や家族の方々はとても素晴らしいものでした。私がホームステイさせていただいた両方の家で皆様は私を家族のように迎えてくださいました。長崎ではお父様が奥様と娘さんに「家族のようにもてなしてあげなさい」と言ってくださいました。お別れする折には私に「又是非お越し下さい。私たちは家族です。」と皆さんが言って下さいました。広島では木戸先生が PAX チームのメンバー全員と WFC の館長を日本の茶道でもてなして下さったばかりでなく、どのように茶道をおこなうかを説明までして下さいました。・・・有難うございました。長崎の古賀一家の重朗さん、絢子さん、真理子さん、あなた方の親切なおもてなしや、謙虚なお心遣いはそ

のお気持ちがにじみ出ておりました。あなた方が主にお仕えなさるように私の祈りもあなた方とともにあります。長崎バプテイスト教会の牧師先生の友納靖史さん、主事の西脇慎一さんへ、「どうか主が皆様を祝福し、導き続けて、主の御手にある道具とし用いられますように」と祈ります。高原弘子先生(長崎を世界に伝える会代表)にも細やかな温かいお心遣いをいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。また末永浩先生に真夏の空の下、被爆遺構のご案内をいただき、関口良雄先生に的確な通訳をしていただきましたことも、深く心に残りました。私はバーバラ・レイノルズのように「私も被爆者です。」と言えればよいと思いますが、そうではありません。けれども私が述べうる一つのこととして、日出ずる国でのこの二週間の間に、私は日本の方々を愛し敬うことを学びました。彼らは私に、望む心があれば他の何にも増して赦しと和解は実現できることを教えてくれました。

2007 年韓国 PAX

ケヴィン・リーダーのプロフィール

現在、USA 在住。フロリダ州で育ち、後にオハイオ州に住む。23 歳。昨年、メイロンカレッジ(クエーカー大学)を卒業。英語、歴史、経済を専攻。メイロンでは平和と地域社会に重点を置くメノナイト教会に所属。メノナイト・セントラル・コミティ(MCC)のプログラム SALT(共に奉仕し学習する)を通して韓国アナバプティスト・センターでボランティア活動をした。平和活動家たちの教育にあたり、かつ彼らが他の団体や個人に使えるオンラインとオフライン資源のマニュアルを作成した。趣味は小説を書くことで、卒業後も執筆を続ける予定。

ケヴィン・リーダー

このたび私は日韓の平和活動家達で友好とネットワーク作りを続けているWFCのPAXメンバーとなる機会を得ました。

アメリカ人の私が韓国の代表として広島を訪問したことは興味深い体験でした。参加者も様々でしたし、私は自分自身のいろいろ異なる内面の思いに直面し大変でした。日本に対してはアメリカ人故のある感情があり、韓国滞在を経験した者としてはまた違った感情が日本や米国に対してあるからです。

私の役割を考えると、自分の立場が複雑であることに気がつきました。例えば、父が米国海軍退役軍人なので、私は子供のころ真珠湾攻撃を深い悲しみで受け止めていました。米国海軍はそれを深い悲劇ととらえていますし、アメリカの学校教育も広島や長崎への原子爆弾攻撃は軍事上必要であった、しかも命を救ったと私に教えていました。

この戦争に対する日本人の考えを知って、歴史は反対の見解を取っているように思えました。すなわち、パールハーバーの攻撃はアメリカが日本に干渉するのを避けるために軍事上必要であり、原爆投下は不必要な悲劇であったというわけです。

これらの相反する歴史の意味を理解するのは難しいしかし韓国人として見ればことは更に複雑です。韓国では、植民地支配をめぐる様々な問題のせいで長い間日本は抑圧者とみなされてきました。アメリカはといえば英雄視されたり暴漢と見なされたり問題しだいです。

勿論この歴史観をすべて真剣に取り上げると非常に混乱します。だからこのようなさまざまな話に直面すると、自分が良く知っていて自分に最も都合の良い話を受け入れ、その他の話は拒否する方を選ぶのです。だから私達が戦争中の対立の原因を見つける事は難しいのです。アメリカ人はアメリカの話を、日本人は日本の話を、韓国人は韓国の話を信じる、だから異なった民族間での話し合いはいらいらが募り不毛となるのです。

各国の話にはそれぞれ真実があると思ったのでこの意見の対立について二三日考えてみました。勿論全ての話が同時に完璧な真実ではありえません。誰の話がほんとうなのか。誰が被害者で、誰が抑圧者なのか。許さなければならぬのは誰で、許されなければならぬのは誰なのか。

広島平和資料館に新発見の瞬間がありました。私たちはそこで1945年の広島悲劇について被爆者から話を聞く機会がありました。彼が体験した原爆と恐怖について説明してくれました。私は彼がアメリカを非難するものと待ちかまえました。アメリカは彼から多くのものを奪ったのですから。しかし、その時私は驚きました。彼は責めるところか、当初広島の人々は日本の快進撃を喜び、パールハーバーでの勝利を賞賛し、アメリカ人の犠牲を喜んだ事の謝罪をしたのです。彼は東京も原爆を開発しようとしていた事、そして日本がそれに成功していたら嬉々として使い、ニューヨークやワシントン破壊していただろうと打ち明けました。

彼の正直な歴史観が私には不思議でした。彼の非難はどこへ行ったのか、憎しみや怒りはどこへ行ったのだろうか。一方の国が被害者で、他方の国が侵略者であると非難するのではなく、彼は被害者、侵略者の双方に、国家に言及することなく人間性を視ているように思えました。ある国が他国を非難するとき、たいてい非難しているその手は罪なき民の血ですでに汚れていることを、彼はわかっているようでした。

悲しいことに、原爆投下の日に人類の悲劇がおきたという紛れもない真実がありました。韓国が植民地化されたのは、かの地での人類の失敗であり、戦争が真珠湾攻撃から始まったのは人類の失敗でした。国家は夫々こうした戦争の責任を負っており、全く罪のない国家はないという事を学びました。

異なった文化を持つ人々を兄弟姉妹のように思い、アメリカ人、韓国人、日本人をそれぞれ別のグループとして考えるのではなく習慣の違う仲間とみることが平和運動家としての私の願いです。

私はこれらの異なる歴史と格闘してみて、各々の国民が自国の誤りを受け入れ、苦しみもその国の国民としてだけでなく人間の苦しみとしてとらえれば、各々の“物語”もやっと理解できるようになりました。その国の文化というより“人間の文化”という考え方をすれば、加害責任と犠牲はどちらも皆にあてはまることだから、他国の人という理由で非難したり憎んだりする余地はなくなります。広島や長崎の悲劇を被害者の数で判断はできません。ドイツのドレスデンや東京などの焼夷弾で殺された人々の数はどうだったでしょうか。何百万の命を奪

ったホロコーストはどうでしょうか。これらの出来事の方がもっと悲劇的でしょうか。絶対にそうではありません。

アメリカ人、韓国人、日本人としてではなく人間として考えてみると、広島や長崎の出来事が単に生命の損失、怪我、病気、家族の離散といった悲劇にとどまらない事がわかります。おそらく、より大きな悲劇はそうした悲劇を二度と起こさないようにという要求を無視して世界の国々が自国の政府のためにこの死の科学技術を用いる事を選択したことでしょう。

多くの人々がすでにこの事に気づいていたのだと広島に来てわかりました。そしてこの悲劇から広島を再起させたのがそのエネルギーではないかと思うのです。活力と希望の都市となって、まさに地獄絵であったに違いない灰の中から美しい都市として花開いたのです。この希望と地球社会の精神こそどの国の人間であろうと世界中の皆が学ぶべきものなのです。

WFC最新情報

サラ・スウィツァー

WFCの新館長として、ケントと私は暖かく迎えられました。有難うございました。私達にセンターの仕事内容を説明してくださる上に、WFCのボランティアは、たくさんの方々が積極的に支えてくれています。

WFCの被爆者の方は、被爆体験を語り続けています。5月下旬には、イタリアからの約30名のグループに、森下先生と空先生が被爆体験を語りました。岡田さんも被爆体験を話し、聞いた人に一人ずつ折鶴の紙飛行機をプレゼントしています。松島圭次郎先生も、原爆資

料館でほとんど毎週のように被爆体験を話し、センターの宿泊客もよく一緒に聞いています。世界中からの来訪者に、とても貴重な体験を話していただき感謝です。

ケントと私は、“White Light, Black Rain”の特別試写会に出席しました。この映画の監督であるスティーブン・オカザキさんが試写会で挨拶され、その時に山岡ミチコさんも、特別ゲストの一人として参加しました。

WFCのメンバーは、平和文化センター主催の広島での“Live Earth”コンサートに行きました。

7月の終わりに理事が集まって大掃除をしました。8月にはPAXが来るし、8月の特別行事にあわせて準備をしました。何人かの人が、物置として使われていた隣のアパートを、何時間もかけてきれいに片付け掃除をしたりしました。その結果、新しい英語教室に生まれ変わりました。窓を開けるとピース・ガーデンに面しているので、今その部屋はピース・ガーデン・ビラと呼ばれています。ビラは辞書によると、田舎または保養地の大邸宅を意味します。英語の言葉の選び方の良し悪しは別として、私達にとっては、美しいビラであるという意見で一致しました。この新しい場所をえるようにしていただいた家主の森河さんと、色々と改装を手伝ってくださった理事の皆さんに、お礼を申し上げます。

英語クラスが再び9月4日から、新しい場所で始まりました。何人かの新しい生徒さんも増えました。

その他の新しくなった事

●wfchiroshima.net のウェブサイトをご覧になってください。いくつか最近の更新もありますし、これからももっと更新する予定です。

●センターの事務所と食堂が改装されました。これもまた理事の皆様、家主、ボランティアの皆さんのお陰です。

●以前英語クラスに使われていた部屋は、今は完璧にゲストだけの部屋になりました。

●サラは日本料理を習い、ケントは格闘技(空手)を始めました。二人とも日本語を習っています。WFCの皆さんの支援と励ましのお陰で日本文化の数々を学ぶ事ができます。

2007年の5月に日本に来て以来、多くの素晴らしい方々との出会いがありました。皆さんのご親切と、WFCへの貢献に心から感謝です。

友愛ボランティア

翻訳: 吉村修子、平本隆子、兼綱寿美子

山下美枝子、山根美智子、平岡佐知子

編集: 英語版 Kent & Sarah Sweitzer

日本語版 平岡佐知子、栗原尚美



館長: ケント&サラ・スワイツァー



PAX チーム 2007 WFC にて



森下先生と朝日新聞レポーター



PAX チーム被爆地長崎にて



空先生ご夫婦一被爆電車



PAX チーム宮島にて



木戸先生一お茶席



灯籠流し



山岡さん「ヒロシマ・ナガサキ」上演会場にて



平岡、PAXチーム、サラ、山下、栗原